

十六、教

「時に国王有り、仏の説法を聞いて、心に悦予を懐き、尋ち無上正真道意を発し、国を棄て、王を捐て、行じて沙門と作る。号して法蔵と曰ふ。」(『大無量寿経』)

法蔵菩薩は師仏世自在王如来の前に、静かに長跪合掌して、その説法を聞かれる。無上正真の道意に生きたもうがゆえである。

超世無上の本願も、み法をぬきにしてはあり得ない。仏の正覚もまたみ法をぬきにしてはあり得ない。法蔵菩薩は師仏の前に合掌して説法を聞き、心に悦予を懐き、無上正真の道意を発したもうと説かれる。仏法のある処、そこには、必ず法蔵菩薩魂が動いている。真にみ法の聞信せられる処、そこには必ず、法蔵の本願が廻向顕現せられてある。

信とは、固定化されたる心ではなくて、信心の満足を保ちつつ、限りなく大法に合掌する自覚である。

汝の一生を教えの中にひたらせよ。

汝自身を教えの中にあらしめよ。

汝のすべてが教えの中に生かされる時、生きることの無意味の嘆息におさらばするであろう。

教法なき生活は、荒涼たる廢墟に等しい。

教法のないかぎり、人の生活はただ五欲煩惱の満足に過ぎなくなる。

「あなたの生活はあまりに騒々しい。そうした享樂生活よりも、静かにみ法を聞くではありませんか。」

「アホらしい。ばかきさい。」

何の苦もなく、恵まれすぎたあなた、美しい衣裳と、贅沢な食事と、金のかかった遊び道具、そうしたものに埋もれたお嬢様、だがその身辺の何物から、そして毎日々々の生存のどこから、永遠なるもの、尊嚴なるもの、徳、光、等々の世界に通ずるものが生まれてくるのであるか。

人間的享樂のみが、その生活の中心となる時、およそ、み法に耳をかたむけることなどは、ばかきさいなる。私は今、み法を聞くことなどはばかきさい、映画や、ナンセンス雑誌や、三味や、お琴や、ピアノや、などにのみ魂を打込んでばかきさいくない、幸福にして空虚なるお嬢様方の幸福の不幸を思わざるを得ない。

ああ。精神的廢墟に跳る高等なる動物の現実、そこに真のおちつきと喜びがあるだろうか。

一切の人間の幸福を排撃するのではない。

しかし人間生活は、高き教法によって統一さるべきである。

如来の教法によって統一された時、順境に貪欲の虜となり、逆境に悲観、自暴自棄の幽霊となる自己を凝視し、慚愧し感謝して、水火二河より救われるであろう。

謙虚に仏の教法の前に合掌すれば、教えは必ず教えを聞く耳をつけ、恭敬して仏の教法に耳を澄ます時、教法は必ず汝の胸中に大信を成就す。

合掌歡喜して仏の教法に信順する時、教法は必ず、汝の上に念仏真実の生活を成就す。

念仏生活しつつ仏の教法を愛樂する時、教法は必ず汝の上に、柔和忍辱の道味を顕現するであろう。

念仏しつつもなお、その不平愚痴をその善知識に訴えて、慰撫されんとするがごときは、いまだ教法に徹せざるものである。

念仏しつつもなお、他人との忿怨を、その善知識に訴えて、ひそかに知識をわが主張に賛同せしめて、その味方とせんとするがごときは、法の尊嚴を忘れて、法によって煩惱の立場を求めんとする我慢である。大法いまだこの人のものにあらず。

念仏しつつもなお、身の不幸を嘆じて、その知識に本尊に、同情を求むるがごときは、大法を忘れたるものである。

如来は常に現在に説法獅子吼したもうとともに、永遠の沈黙者である。

大法は一大事因縁なり。唯一絶対の事実なり。

真に大法に値う者は、本質的不幸を永遠に捨てたるものである。

世自在王如来は、法蔵菩薩に「汝自当知——汝自らまさに知るべし」とのたまわせたもう。

大法はただこれを領解すべし、大地業報の経緯は、ただこれを慙愧すべし。

如来は、念仏の人をのみ撰取したもう。

その本願以外に、仏と衆生とを一如一体ならしむる何ものもない。

善導大師いわく、

「一明親縁衆生起行口常称仏仏即聞之。身常礼敬仏仏即見之。心常念仏仏即知之。衆生憶念仏者仏亦憶念衆生。彼此三業不相捨離故名親縁也。」

如来と衆生との親縁は、如来の発願廻向によつて、衆生の三業の上に如来本願の表現せられることによつてのみ成就するのである。念仏の衆生の撰取せられることを明らかにせられたものである。

汝、懈怠を感ずる日

教主聖人の精進を觀ずべし。

汝、人生の苦しさに悩む日

教主聖人の苦闘を憶うべし。

汝、逆境に悲しむ日

教主聖人の流離寂寥を想うべし。

汝、世の無理解に涙する日

教主聖人の無実の配流を想うべし。

汝、努力に報いられざる時
教主聖人の貧しき一生を想うべし。
汝、汝の罪業に泣く日、
教主聖人の前に一切を慚愧して悪人正機のみ教えに更生すべし。
汝、人に瞋恨せらるる日
教主聖人の忍従の一生を想うべし。
汝、傲慢を觀ずる時
教主聖人の愚禿の名告りを拝すべし。
汝、順境に立てる日
教主聖人のご苦勞を憶念すべし。
汝、生の歡喜を得たる日
教主聖人と同一国土に生まれてその教えを聞くを得たる宿善を感謝すべし。

今これを書いている時、電報、「キクケサ五ヂシスアスマイソウスカタヤマ」
片山キク！ 島根県吉田町の片山の奥さんが死んだのか。片山くに、片山きく、越
堂君と語る、やはり若奥さんだ。ああ。ご主人、可愛い盛りの嬢ちゃんたち、くに法
姉等々の悲しみの顔が見える。ご一家のご悲歎が偲ばれる。年は三十五六のはずだ。
益田支部の中堅また一人彼岸に飛ぶ、悲しき日である。たったこの間、福山の準ちや
んを喪つたばかりなのに。ただ愕然、念仏、謹んで弔意を表す。(七月十六日午前十
時)

「今日も人の死ぬる日にて候」
無常迅速、だれもかれもみな一度はその身になるのだ。

善導大師『往生礼讚』に言わく、

「人生不精進 人生れて精進せずば
 喩若樹無根 喩へば樹の根無きがもし
 採華置日中 華を採りて日中に置けば
 能得幾時鮮 能く幾時か鮮なるを得ん。
 人命亦如是 人の命亦是の如し
 無常須臾間 無常須臾の間なり
 勸諸行道衆 諸の行道衆に勸む
 勤修乃至真 勤修して真に至れ。」
同胞よ。大師の嚴誠を身にしめて、念仏一道に精進しよう。

人生は教えである。すべての人は教えるとともに習う。すべての人が教師である
とともに被教育者である。

親鸞聖人は、經を権化と真実とに分類せられたが、権化以前に虚偽の教えがある。
虚偽と、権化と、真実、この三種の教えが入り乱れて人生を形ち造っている。

虚偽の教えを捨てて権化の世界に入ることすら容易ではない。ましてや、真実の教えを聞くことは極難事である。

人は教えだけしか己の生活を成就することはできない。信じられる教えだけがその人の生活となる。ゆえに、真実の教えを聞き得た者は喜ばねばならない。

今の時代でも、宗教などの必要があるものか、という人がある。そうまで言わなくても、あまり関心を持たずに過ぎてゆくのが大部分であるかも知れない。

時に宗教はなくても、生きてゆけるであろう。物質的にも、精神的にもあまりに困らず、人間生活の楽しさを享受してゆけるがゆえである。それゆえに宗教はいらぬと言ひ張る我利的な人には沈黙するよりほかないかも知れぬ。しかし宗教とは、人生および自己の本質に触れたる教えである。たとい多くの場合、宗教が人間苦の体験によつて求め始められるにしても、苦悩が一時的に解消された時、宗教もまた不必要になると言つた人は、いまだ宗たる教え、すなわち生命としての宗教の本質に徹したのではない。真の宗教は、人格の根本的自覚であり、人生生活の本質的解決であり、その高き指導原理の提示である。

『大無量寿経』の宗教は、人間の一切の功利的な不純心を全否定して純粹真実な信心を成就する唯一の教えである。

教えが人の心を養い育てて向上せしめるのではある。しかしその精神生活の程度が、教えを受け取り承認するのでもあるがゆえに、浅い心には、深い教えは領解されない。であるから、一度衆生の機が一処にとどまり、われこそ教えを左右せんとし4て、教えを受け入れないならば、生活の向上はあり得ない、ゆえに衆生の教えは、必ず、眼を内面に転ぜしめて、限りなく衆生の機を深信せしめて、教えをさえぎり妨げる一切を断滅して、無条件に信順せしめるのである。

多くの場合、人が教えを受け取るのであり、人が教えを信ずるのではあるが、しかし真に教えがその人に生きた時は、教えは人よりも高次の位置に立ち、教えこそ人を招喚し、教えこそ絶対無条件に人に君臨してその人を動ずるのである。

その時大法は、一切の煩惱生活を止揚し統一して、五欲によつて法を曲げることを許さない。聖人の信心の世界がそこにあつた。

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり。念仏はまことに浄土に生まるるたねにてやはんべらん、また、地獄に墮つべき業にてやはんべらん、そうじてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて地獄に墮ちたりともさらに後悔すべからず候。」

そこには、教えの前に絶対信順せる者の謙虚と、金剛不壊の一道とが光っている。しかしそれはけつして、世のいわゆる、盲信または狂信ではない。真実の教えは、必ず人の内に教えに対する価値批判の眼をつけ、真実なるものを真実なりと信知せしめる。真実の教えは、必ず人の内面に自覚を成就し、自証の智慧を顕現して、汝自体の真相を信知せしめる。「いづれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし。」との深き自覚においてのみ、念仏の法は、無条件に祖聖を動かしたのである。

聖者か悪逆か、その差はただ、教えが生きるかいなかによるのである。

聖者必ずしも煩惱が弱いのではない。悪者必ずしも煩惱罪業が重いのではない。聖者必ずしも完全無欠であるのではない。聖者たるゆえんはただ、かかつて、絶対唯一の高き真実教を求めて、教えの前に絶対無条件に合掌せしことにある。見よ「愚禿が心は内は愚にして外は賢なり。」法然上人の、いわゆる、外智内愚、外是賢内即愚、外は是れ善、内はすなわち悪、内虚外実、内仮外真の凡夫とはわがことであるとの自証に生きつつも、万世にわたる聖人ではないか。

人間の全体が大法に直接に親切せず、そこに微塵でも、我を持って教えを弄ばば、聖人の信境に同一なることはできない。したがって、そのままであるかぎり、教法と水油相反したる、抽象的な一肉塊を抱いて、生活の無意味に灰色な倦怠をおぼえ、あるいはより深き、墮落へと進むであろう。

されば、われらは一生をかけて、教えに信順して、聖人の生きたもうがごとく、全我を挙げて教え中心の生活を成就しなくてはならない。

真のよろこびも、力も、意義も、かかつてそこにもみあり得る。しこうして教えを代表してわれに向かいたもうは、教主善知識なるがゆえに、善知識の前に無条件に合掌して歩まなくてはならない。

親鸞聖人を憶念する時、必ずいかなる行きづまりも開いて、白道上に更生せしめられる幸福を合掌感謝せずにはいられない。